

昭和48年1月13日第三種郵便認可

HSK通巻505号

発行日/2014年4月10日(毎月10日発行)

編集人/白老町手をつなぐ育成会 佐藤春光

北海道白老郡白老町字萩野 310-110

TEL (0144) 83-3537

会報/211

発行人/北海道障害者団体定期刊行物協会 (HSK)

定価/1部100円(会費を含む)

HSK

2014. 4月号

ほほえみ



白老町手をつなぐ育成会

親離れ、子離れ!

ホーム『そよ風』が出来てから、「グループホームに入りたいのですが」そんな声が何人かから上がりました。20歳になると成人を祝います。独り立ちの節目なのです。健全児と言われるほとんどの子ども達は18歳で親元を離れ、進学にしても就職にしても一人で生活することになります。そこから、直接的な親の庇護を離れ、独り立ち=自立が精神的にも肉体的にも始まるのです。

子どもに障がいがあると、いつの間にかわが子は自立できないと思い込んで、家庭での囲い込みになってしまいがちです。一人での生活が無理でも、グループホーム等を活用して親から離れて自立への準備をさせた方が、親離れ子離れできると思います。

「うちの子どもは自立は無理です」という前に、どんな条件がそろえば無理でないのか、どうすれば自立に向かって歩けるのか考えてみたいものです。それが育成会が存在する意味ですし、私たちが作業所やグループホームを作ってきた意味でもあるのです。

もしかしたら、いつの間にか親自身が『子離れ』出来なくなってしまったのかも知れません。『子の自立』それは以外と『親の自立』なのかも知れません。

30歳になっても40歳になっても親も子も動きません。子が50歳になる頃は親は70歳・80歳です。子もそろそろ高齢化が始まります。知的障がい者の老化現象は早く始まるのです。いよいよ身動きがとれなくなってきたとき『この子より1日でも長く生きたい』というかなわぬ願望が出てくるのです。

今まで、『この子より1日でも長く生きたい』という言葉は、親の愛情の深さとして言われて来たように思います。しかし、この頃は、わが子の自立が準備できなかった親の弁解に聞こえて来るようになりました。これからの時代は、『親はなくとも子は育つ』様にすることが親の努めの様な気がします。

障がいのある人の今

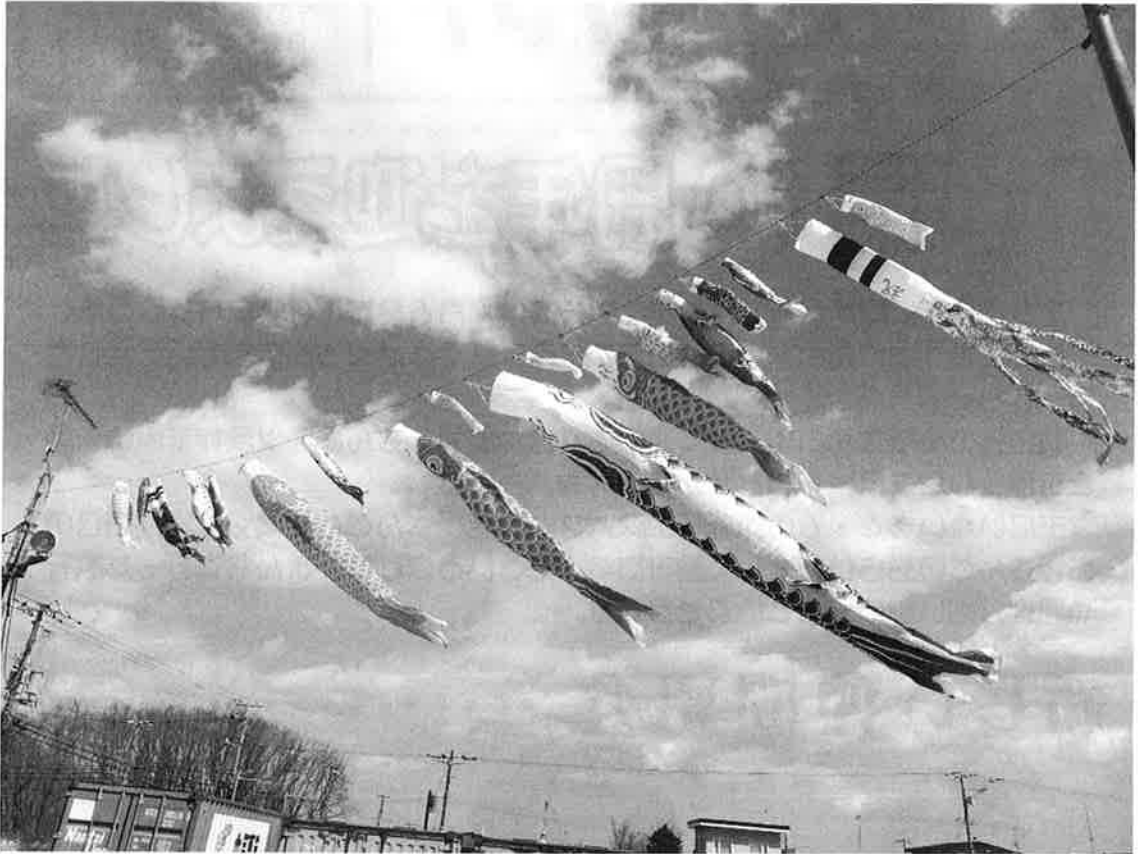
障がい者の収入

きょうされん(全国共同作業所連絡協議会)がアンケート調査をとりました。その調査では、障がい年金と工賃などを含めた年収を調査したところ、112万円以下が85%、112万円~200万円以下が14%、200万円以上が1%でした。99%の障がい者が『ワーキングプア』と言われる水準での生活なのです。40歳以上の障がい者の半数以上が親と同居していました。結婚していたのはわずか4%でした。

このアンケートは何を物語っているのでしょうか。障がい者は親や兄弟等の支援無しには生活がなりたたないという現実なのです。

『自己責任』が強調され始めて、公的責任がどんどん後ろに下がり始めました。生活保護も親・兄弟の責任が言われ始めています。障がいは本人の責任なのでしょうか。それでは兄弟の責任なのでしょうか。産んだ親の責任なのでしょうか。文明社会にあって良識のある人ならノーと言うはずです。障がい者を社会全体がどう支援するかという課題が、私たち文明社会に突きつけられた発達のパロメーターだと思うのです。

元気に泳ぐ鯉のぼり



この季節、風がとっても強くて、鯉のぼりは何度もちぎれて飛んでいきます。その度に近所の方が拾って届けてくれます。あまりにも飛ばされることが多いので、今年は小さな鯉のぼりを多くしてみました。小さいのばかりだと寂しいので、大きな鯉のぼりも何匹かつけてみましたが、やはりすでに3度ほど飛ばされました。

『春は風が強い』しかし、この風が北海道に春を運んで来てくれているのですね。

平成26年度社会福祉施設整備事業費の内示が北海道胆振総合振興局からありました。

社会福祉法人ホープが設置主体で、国と道より中登別に新規で作業所を建設するための補助金が、国と道を合わせて61,246,000円（内示額）という通知です。これから入札、建設などの諸準備が忙しくなると思います。内示後、すぐ登別市長にご挨拶に行ってきました。

ふろんていあ♡メール
Frontier

通所授産施設
フロンティア♡MAIL
2014年4月号
〒059-0922
白老町萩野 310-110
TEL・FAX 0144-83-3537

満10周年を迎えました

2005年に開所したフロンティアもこの4月6日で10年になりました。その前の共同作業所からの歳月を振り返りますとたくさんの出会いと別れがありました。

利用者のみなさんの中で長く通所された小関利一さんは四ツ葉作業所の一角をお借りしてスタートした時からのメンバーです。

主にいきいき4・6の売店「エスパス」の店員さんとして頑張り続け毎日のお客さんとの語らいが楽しく励みになったということ、みんなで行った旅行や温泉が思い出に残っているそうです。

新しい仲間紹介



さわだ まちこ
澤田 まち子さん

火曜、金曜に利用しています。B班で、のりや封筒の作業をしています。



いわた まこと
猪股 諒さん

伊達高等養護学校を卒業し登別から来ています。パン作りをしたいです。



ふくだ げんいち
福田 竜一さん

火曜、木曜に利用しています。エコ班で、缶の分別をしています。



日本ハム VS オリックス



日本ハムファイターズさんから【福祉シート】チケットをいただきました。5月2日、夜の観戦です。



ウォーキングで体カづくり

雪どけの3月上旬から午後ひととき、萩の里センターハウスまでの約3キロのコースを歩く運動に取り組んでいます。

一人で毎日運動を続けることはとてもむずかしいですが、仲間が一緒なら頑張れます。体重を減らしたり、血圧や血糖値を下げるなど『健康で働くこと、元気で暮らすこと』を目標に頑張るぞ——！！



8%がやってきた!!

17年ぶりに消費税増税にともない私共フロンティアの商品価格も変更させていただくことになりました。

何卒、ご了承くださいますと共に今後とも変わらぬご愛顧のほど賜りますようよろしくお願い申し上げます。

利用者の会今年度 役員のみなさんです

会 長 佐藤 昌義さん
副会長 大廻 眞裕さん
門松 良枝さん
書 記 菅井 麻貴さん
西島 貴子さん

運営・進行
よろしく申し上げます

フロンティアの

平成26年度事業計画

3月に開かれた理事会及び評議員会で、平成26年度の事業計画が承認されました。社会福祉法人ホープは、この9年間利用者の賃金アップを重点に取り組んできました。その結果開設当初と比べると、1万円の平均賃金から2万円の平均賃金へと前進させることができました。また、利用者の人数も2、5倍となり、職員数も同じように増え、労働における地域の受け皿として社会的資源になることができたと考えています。

しかし、走り続けてきたはずみと、現在のままではこれ以上の賃金アップが難しいという限界も見えてきました。10年目という節目に当たり、今までと違った方法で作業の事業化を図ることが、新たな建設につながると考えます。

今年は、利用者への直接支援を重点にしながら、仕事の事業化を図っていきます。

【 目標 】

- ① 利用者一人一人の願いを受け止め、利用者の自立と社会参加を促進する
- ② 利用者の経済的自立を可能とする労働賃金を支払える事業の確立を目指す
- ③ 利用者が地域で生き生きと生活するために、地域との交流を促進していく
- ④ 法人は研修を大切に、職員は積極的に研修に参加し、自らの資質を磨く
- ⑤ 法人に寄せられた多くの善意に応えることのできる事業展開を目指す

※ 施設外就労の試み

3万円の平均賃金を目指すとしたなら、どのような道を通ればよいのだろうか。今までにたくさんの創意工夫とたくさんの善意によってフロンティアの利用者の賃金を上げておくことができました。

しかし、ここに来ていよいよ大きな壁にぶつかってきました。お菓子やパンを作ってもそれを売る販路がなければ作れません。人間や機械が変わらない限り、生産量も今のままで変わりません。さあどうする。と悩みました。

そんな時、登別の若木さんから業務委託の話がきました。若木さんが長年貯めてきたおもちゃ博物館を開くというのです。社会福祉法人ホープと若木さんが協力して、この博物館を運営することにしました。そのすぐ後に、今度は一般財団法人アイヌ民族博物館から、博物館の前のハウスで軽食・喫茶をやって欲しいという依頼がありました。

そこで、これまでの施設内就労から施設外就労に大きく踏み出してみようとフロンティアの職員で話し合いました。「急すぎる」「やりすぎる」「無理だ」「利用者がいない」などたくさんの意見が出ました。喧嘩がくがくとした議論を4時半から7時半までやって、ともかくやってみよう挑戦してみようということになりました。急な展開で、職員と所員には苦勞が多いかも知れませんが、新しいフロンティアを創るために力を発揮してもらおうと思います。なかなか時間が無くて職員同士の話し合いもままなりません、利用者の未来を何とかしたいという思いがあるからこそ、こういう話し合いができるのだと思います。フロンティアはまだまだ健在です。

玩具店店主 若木日出男さん

博物館開設へ

おもちゃや骨董品1万点展示

登別の玩具店店主、若木日出男さん(76)＝登別東町2丁目が24日、町内の国道36号沿いに、総合博物館「古趣 北乃博物館」を開設する。展示品は玩具を中心に骨董品や書など1万点以上を予定。水産加工場を3年前に買い取り、たつた1人で準備を進めてきた。夢実現を楽しみにしている。(鞆子理人)

若木さんは脱サラで玩具業界に入った。1982年(昭和37年)に温泉街にあった土産屋に番頭として勤務していた時、店内の一部でおもちゃを扱ったのが出合い。現在店主を務めるワカキ玩具店は71年から続く老舗。博物館構想は20年前から温めてきた。「登別に自然は多いが、文化施設があつてこそ一人前の都市」というのが持論だ。

一方で「人間の作った文化物は理解されるまでに時間がかかり、保存が大変」という課題がある。古いおもちゃがいつの間にか捨てられてしまつように、引き継ぎの難しさから、無関心による喪失という宿命も持つ。保存の場を作りたかつたと話す。

目指すのは「総合博物館。大英博物館のリアル版です」と笑つた。2階建て「延べ床130坪」の博物館には、昭和40年前後の玩具類ほか趣味で集めた掛け軸や陶磁器などの骨董品、絵画や彫刻など1万点超を並べる計画だ。

若木さんは「日本文化を主体にした展示にする方針ですが、普遍的な価値があるものは全部収集し、幅広く展



▲ 玩具や骨董品を集めた北乃博物館オープンへ準備を進める若木さん

営業時間は午前10時から午後4時まで。毎週水曜日が休館日。入館料は大人500円、子ども200円。問い合わせは若木さん、携帯電話080・8295・7363へ。

西胆振 登別

中部支社
登別市中央町1-12-11
TEL 0143(85)4530
FAX 0143(85)4773
ホームページ
<http://www.muromin.mnw.jp>
Eメール
chubu@muromin.mnw.jp

掲載地域
登別市/登別温泉
ニュース、生活情報、ご購読、
広告の申し込みは上記の電話、
メールへお知らせください



HSK ほほえみ

昭和48年1月13日 第三種郵便物認可
発行日 2014年4月10日発行(毎月10日発行)
HSK通巻番号505号
編集人/北海道白老郡白老町字萩野310-110
白老町手をつなぐ育成会 佐藤 春光
Tel. 0144-83-3537
会報/211号
発行人/北海道障害者団体定期刊行物協会(HSK)
定価/1部100円(会費に含む)